

皮を脱いで育つスズムシの幼虫



生まれたばかりの幼虫、体長3mmほど



土の中からはいだしたスズムシの前幼虫たち



## スズムシの七変化

### ① 八十〜二百個の産卵

スズムシのメスは、尻の先に産卵管を持っていきます。産卵管というものの、管ではなく、二枚の細長い板が合わさってできています。秋、交尾を終えたメスは、この産卵管を地面に刺して、1個ずつ卵を産みつけていきます。メス一匹で一度に八十〜二百個もの卵を産むといわれます。

白い卵は、長さ三ミリ、幅〇・八ミリくらいの大きさをしている、地表より三ミリから一〇ミリくらいの深さのところ産みつけられ、卵のまままで冬を越します。卵は土の中に生みつけられることで、乾燥や外敵から守られます。

### ② 初夏の頃、孵化し幼虫へ

初夏の頃、地温が二十五度位になると、固い卵の殻を破って幼虫が生まれます。生まれたばかりの幼虫は、すでに脚も触覚も備えています。全身薄い膜の袋に包まれ保護されており、前幼虫とよばれています。目だけがぼつんと光るその姿はまるで小さな魚かエビのように見えます。この幼虫は、体をくねらせるようにしながら、土のすきまをぬって地上を目指して進みます。地表の近くに来ると、幼虫は薄い袋を脱ぎ捨て、縮まっていた脚や触覚を伸ばします。体は白く透き通って柔らかく体長三ミリ程と小さいものの、ほぼ成虫に似た姿となります。

### ③ 脱皮を繰り返して

地上に出たスズムシは、成虫になるまでに6〜7回脱皮を繰り返しますが、そのたびごとに一回り大きな幼虫に育っていきます。皮膚も硬くなり、しっかりとした足どりで歩き、餌を探し回るようになります。3〜4回目の脱皮がおわり、スイカの種くらいの大きさになると、小さな四枚の翅が目立つようになり、メスには産卵管があらわれ、オス、メスの区別が付くようになります。

### ④ 幼虫から成虫へ

脱皮を繰り返すうち、メスの産卵管は、剣のようにまっすぐ伸びて長さを増し、前翅も幅を増して大きくなっていきます。スズムシが成虫になる最後の脱皮を羽化といい、胸部の背面が割れ、白く縮んだ翅が殻から抜け出てきます。皮を脱ぎ終えると、柔らかな翅の翅脈に体液が送り込まれ、二枚の前翅がゆつくりと広がっていきます。白く柔らかい翅はやがて黒く固い翅になります。羽化後五日ぐらいたつと、二枚の後翅を落とし、それからオスの鳴き声が聞こえるようになります。

脱皮を終え、成虫の翅をひろげはじめる ▶